

令和2年度岐阜県県移住促進団体活動推進事業委託

福祉×移住による
地域課題の解決につなげる
ネットワーク事業2020

福祉 × 移住 × ○○

社会福祉法人いぶき福祉会



(岐阜で暮らし働きたくなる福祉のシゴトの魅力発信事業 2018・2019) につづいて

発展性 継続性

(Next phase)

地域課題を解決する「福祉×移住」のプロジェクトの実行

⑧

Program 2021

プラットフォームとしての福祉の物語ワークショップの展開

目標と事業内容

Program 2020

⑦ 【レポート】 「プロジェクトのネタ帳」 学びを次へ
「物語で未来を構想する～福祉×〇〇×移住の関係の結び目を編むために」

⑥ 【ワークショップ】
地域課題を解決するプロジェクトづくり 2020年10月12日（月）参加者25名
福祉×移住のエッセンスを探る 10月28日（水）参加者18名
ゲスト：夢古道おわせ 伊東将志氏（尾鷲市） 11月11日（水）参加者17名
マーケティング手法を活用した物語の作成 11月25日（水）参加者22名

⑤ 【公開講座・ガイダンス】 2020年9月30日（水）参加者29名
「福祉×〇〇×移住」の可能性とは
ゲスト：一般社団法人ホワイエ 柴原孝治氏（白川村）

汎用性

福祉を移住も日本全国の課題
福祉はすでに日本の巨大インフラ

先進性

地域課題解決の手段に
福祉を 移住促進のプラットフォームに
「間」をこえるきっかけに

重点施策

すべてオンラインで開催
新型コロナ対策および多様な参加

④

理解だけでは行動にはつながらない。
具体的なプロジェクトを。→計画ではなく物語。ネタ帳で。

② 県外の人に知ってほしい

③ 福祉と移住の親和性と可能性を、県内の福祉以外の人に知ってもらわねば

2017のある日

① どうして福祉人材確保と移住施策がバラバラなんだろう。

Program 2018

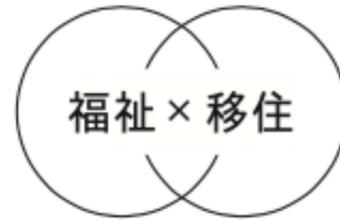
福祉の仕事は多様
やりたいことできるかも
これみんな福祉です。それ岐阜にあります。

Program 2019

県内の多様な間での気づきの場
福祉から移住、移住から福祉を
京都・沖縄での取り組みから

必要性

地域課題の解決につなげる
ネットワーク事業 2020



「物語」で 未来を 構想する

「福祉 × ○○ × 移住」の
関係の結び目を編むために

contents

- 1** プロジェクトの背景
地域の未来を「福祉 × ○○ × 移住」で構想するために
- 2** ガイダンス 2020年9月30日（水）
「福祉 × ○○ × 移住」の可能性とは
- 3** 第1回 2020年10月12日（月）
「福祉 × ○○ × 移住」のエッセンスを探る
- 4** 第2回 2020年10月28日（水）
「福祉 × ○○ × 移住」実現のために：「物語」で未来を構想する
- 5** 第3回 2020年11月11日（水）
自身の「物語」を書く
- 6** 第4回 2020年11月25日（水）
お互いの「物語」を重ねる
- 7** 2020年12月～未来へ
ワークショップで生まれた物語と今後の展望

2 ガイダンス 2020年9月30日(水)

「福祉 × ○○ × 移住」の可能性とは

概要

- 日時** 2020年9月30日(水) 19:30-21:00 ※(Zoomによる)オンライン開催
- ゲスト** 柴原孝治(岐阜県白川村 一般社団法人 ホワイエ代表)
- 進行** 平田直大(沖縄県 一般社団法人しまのわ代表)
- スピーカー** 北川雄史(岐阜県 社会福祉法人いぶき福祉会専務理事)
森田直広(沖縄県 波と風と合同会社代表)
- 参加者** 29名
- ねらい**
- ・当プロジェクトの趣旨と「移住×○○×福祉」の可能性を考える。
 - ・ゲストの柴原さんの地域づくりの話を踏まえて、福祉や移住を通じた地域での課題解決の可能性を検討する。



柴原



平田



北川



森田

7

2020年12月～未来へ ワークショップで生まれた物語と今後の展望

対話から生まれた、未来を構想する物語

ここでは、ワークショップを通じて生まれた7つの物語を紹介します。

福祉施設はいらない？

山本友美さん
(岐阜・いぶき福祉会・デザイナー)

これからの私

森俊介さん
(岐阜・金融)

トモコの物語

堀部智子さん
(岐阜・生活協同組合)

物語

戸上瑞紀さん
(三重・障害者支援)

移住×○○×福祉から始まる
「温かい対話をするIoT家具」をつくらう 2021年の桐子の物語

中川桐子さん
(徳島・地域支援)

福祉団体から地域づくり

勝又恵理子さん
(千葉・NPO支援)

誰もがいることができる
場であるために

金丸泰子さん
(東京・作業療法士)

若者と介護福祉

団塊の世代が75歳以上となる2025年には、日本の高齢化率は30%を超える。私が在住する飛騨地方はこれよりも早く高齢化が進んでおり、諸問題に対応するためには若者の力が必要だ、とどの場でも議論になる。私が20年度に携わっている介護福祉の分野でも同様だ。

若者と介護福祉一。コロナ禍であっても有効求人倍率が約4倍となっている介護関係職種に若い力を集めるにはどうしたらいいか。それは介護を「高齢者のお世話をする仕事」と捉えるのではなく、「地域を担



い、地域を創る仕事」と捉えることにあると考える。

農業や商品開発などさまざまな取り組みを地元業者と連携し、利用者、職員とともにやっている社会福祉法人がある。ほかにも全国の事例を調べていると、地域に開きながら、地域（住民）と対話し、事業に取り組んでいるところに若い人材が集まっていることが分かった。

介護福祉を起点に、業種などの壁を越えた事業を通じて、地域を創る。若者が介護福祉に関わりたいと思うヒントはここにあるのではないだろうか。

(十六総合研究所研究員 森俊介)